

活動的高齢女性の生きがい獲得とその変遷過程

——内省と創発の概念に注目して——

片桐 資津子

本稿では、活動的高齢女性が、いかにして人生の危機を乗り越えて生きがいの獲得に至ったのか、内省と創発の概念を使ってそのメカニズムを探究する。そのため、離別が珍しかった1960年代に4人の子どもを抱えて離婚したBさんの生活歴に着目する。

分析の結果、危機的状况に直面したとき、対他関係において生み出された矛盾が発端となって、対自関係においてなされる反復的な内省を経て創発が作動し、生きがい獲得に至っていることが示された。しかし年齢とともにこういった危機を予期できるようになり、対他関係においては否定的要素の排除によって生きがいを変化させていた。

この結果は、社会学的自己論において、矛盾が他者に受け入れられるようなかたちで自己物語を書き換えるという先行研究の知見と合致するのみならず、自己物語の書き換えが反復されるうち、次第に、矛盾を受容してくれる他者のみを自己物語に取り込むという別の知見を示すものである。

1 研究の目的

本稿の目的は、活動的高齢女性の生活歴編集データを内省と創発の観点から分析することによって、生きがい獲得とその変遷過程を明らかにすることである。活動的高齢女性Bさんの生活歴に注目するのは、20世紀を生き延びてきた離別シングルマザーが立ち向かった人生の危機とその克服のあり方が盛り込まれているからである。

生きがいとは「自分の属する社会の中で、個人が人生の意味を追究していく」（高橋・和田編 2001: 55）ことである。本稿では、生活歴のなかに“生きがい歴”が含まれているという認識のもと、分析枠組みの守備範囲をBさんの対自関係（内省と創発）に設定するとともに、

対他関係（身近な他者と準拠集団）にも注目して、彼女が危機的状况のなかで何に意味を見出してきたのか、その変遷過程を含めて探究していく。本稿の問いは「Bさんは、どのように人生の危機を乗り越えて生きがいを獲得し、さらには変化させてきたのか。その際、いかなる他者がその生きがいを肯定／否定したのか」というものである。

論文の構成は以下の通りである。まず本稿の問いを自己物語論の視点を導入することによりリサーチ・クエスチョンとして提示する。それは本稿の問いを社会学的自己論に位置づけるためである（2節）。つぎに調査の概要と生活歴編集データの特徴を説明する（3節）。さらに生きがい獲得とその変遷過程を考究するために、対自関係（内省と創発）と対他関係（準拠集団や身近な他者）という分析枠組みで、Bさ

んの生活歴編集データを分析していく。その際、幼少期から中年期、そして高齢期までの時間的経過のなかで直面した人生の危機や矛盾に着目して、Bさんの生きがい獲得とその変遷過程を考究する(4節)。最後に結論と残された課題を示す(5節)。

2 自己物語論の視点

本稿の問いとの関連で、社会学の先行研究を概観すると、「自己物語」(浅野 2001、2006; 井上 1996) 論の視点が参考になる。

自己物語とは「人が自分自身について語る物語」(浅野 2001: 4) であり、自己について「現実あるいは架空の出来事や事態を時間的順序および因果関係に従って一定のまとまりをもって叙述したもの¹⁾」(井上 1996: 21) である。その特徴は、①視点の二重性、②出来事の時間的構造化、③他者への志向の3点にまとめられる(浅野 2001: 7-12)。

こういった3つの特徴をもつ自己物語論の視点は、本稿につぎのような示唆をもたらす。

まず、①視点の二重性は、Bさんが“物語を語る状態”と“物語に登場する過去の状態”を同時に体験することを示唆する。つぎに、②出来事の時間的構造化は、自己物語を語る際に、Bさんにとって意味ある出来事を時系列的に、プロットとして配列することを含意している。生活歴インタビューの時点から遡及して、つじつまが合うよう、何を語り、何を語らないか、Bさんが過去の出来事を選んでいるからだ²⁾。

さらに、③他者への志向については、Bさんが自己物語としての生活歴を、他者である筆者に語る時、一貫性あるものとして筆者に納得してもらい必要があることを示している。自己物語が「他者との共同作業」(浅野 2001: 212)

のなかで生み出される所以である。

ただし、ここでいう他者への志向には、視点の二重性がある。1つは、生活歴に登場する過去のBさんの対他関係(身近な他者と準拠集団)であり、もう1つは、インタビュー時のBさんの自己物語の聞き手である。

このような特徴を有する自己物語論において本稿との絡みで重要なことは、2つの異なる他者への志向性において、“忘却された矛盾³⁾”が二重に存在することである。

この、忘却された矛盾の二重性とは、第1に、生活歴に登場する過去のBさんが、対他関係(身近な他者や準拠集団)という他者への志向のなかで、忘却された矛盾を抱えていたということである。第2に、生活歴インタビューの聞き手という他者への志向のなかで、Bさんが一貫性のある自己物語を語ろうとしたにもかかわらず、それでも忘却された矛盾が残されるという点だ。つまり本稿で自己物語論の視点を導入することにより、生活歴インタビュー時のBさんは認識したが、過去のBさんは認識していなかった“忘却された矛盾”だけでなく、インタビュー時の聞き手は認識したが、語り手のBさんも過去のBさんも認識していなかった“忘却され続ける矛盾”も捕捉できるようになる。

しかしながら本稿の“生活歴における生きがい分析”は、「自己への物語論的アプローチ」(浅野 2001: 4) とは大きく異なる。

その理由は、自己物語論では、クライアントの忘却された矛盾に注目するセラピー的な働きかけ——何らかの問題を抱えたクライアントと向き合う際、自己物語を書き換えるために、セラピストといった他者からの志向を積極的かつ意図的に導入すること——を主題としているからである。

本稿ではこういった積極的かつ意図的な他者

からの志向を問題とするのではない。むしろ B さんが生きがいを実行していくなかで、対他関係において出くわした危機や矛盾について、対自関係において堂々巡り（反復的な内省の作動）をしながら、どのようにして創発に至った（何かに気づいた）のか、さらには、対他関係のなかで生きがい（人生の意味）をどう変化させてきたのかという成熟プロセスに研究の関心がある。

ゆえに前節の問いは「生きがい」「内省」「創発」といった概念を用いると、つぎのようなパラフレーズが可能となる。本稿において生涯にわたる生きがい獲得とその変遷過程を考究する際、B さんの人生の途上において、ある時点のいかなる対他関係（身近な他者と準拠集団）といかなる対自関係（内省と創発）によって、その時点における“忘却された矛盾”が解消されて、自らの生きがいをつぎの段階に至らしめたと、筆者との対他関係においてなされたインタビュー時の B さんが対自関係（内省と創発）で捉えていたのかを検討する、とまとめられる。

つまり生活歴における生きがい分析に、自己物語論の視点を導入することによって、内省と創発の作動にとって重要と思われる矛盾を——“忘却された矛盾”のみならず、“忘却され続ける矛盾”も含めて——捉えることができるのである⁴。

3 調査の概要とデータの特徴

本稿で分析する“生活歴編集データ”は、活動的高齢女性 B さんを対象にして実施した生活歴インタビューから得られた“生活歴ローデータ”を時系列的に並べ、本稿のリサーチ・クエスチョンを探究するために再構成したものである⁵。この“生活歴ローデータ”は、修士論

文（片桐 1999）を執筆するため 1998 年に B さんから聞き取ったものである。

まず 1998 年に実施した生活歴を再度取り上げる理由について触れておきたい。それは、今後、2018 年に 90 歳で要介護状態になっている B さんに生活歴インタビューの追跡調査をおこなう際、本研究成果が活用されることになるからである。B さんという同じ生活歴をもつ同一人物であっても、身体状態や時代状況の違いによって、自己物語がどう変わるのか／変わらないのかということについての比較研究に備えたい。

1928 年生まれの B さんは、インタビューを実施した 1998 年の時点で 70 歳であった。調査対象者として B さんを選定した理由は、1998 年の時点で、彼女が社協ボランティアという生きがいをもっていたからである。もう 1 つの理由は、1960 年代という「主婦であることが強い規範性を持った時代⁶」（落合 1994: 48）に、離別シングルマザーとして生きる決意をし、“離別女性に対する差別”⁷に苦悩しながらも、子育てと仕事を両立させて生き延びてきたためである。現代社会では、こういったひとり親世帯への福祉的な支援の重要性が共有されつつあるが（神原 2010）、当時は全く状況が違っていた。

B さんへの生活歴インタビューに際しては、人生で印象に残っていること、楽しかったことや苦しかったこと等、自由に話してもらった。不明な点についてはそれらを整理して、後日、B さんに確認した。インタビューの回数は 4 回、累積時間は 8 時間程度となった。実施日は 1998 年 8 月 12 日、8 月 19 日、10 月 7 日、そして 11 月 4 日である。インタビューの内容はすべて対象者に許可を得てカセットテープに録音した。なお調査倫理に配慮して、B さんの個人

情報が特定化されそうな箇所については別の表現に置き換えた。

4 生活歴編集データの分析と考察

本節では、Bさんという活動的高齢女性の生きがい獲得とその変遷過程を、対他関係、対自関係、矛盾という分析枠組みで分析していく。その際、身近な他者や準拠集団といった対他関係については、Bさんの生きがいに肯定的か／否定的かという観点から検討する。内省と創発といった対自関係については、Bさんが人生の途上で出くわした危機や出来事を、その都度、どのように認識したのかという観点から辿る。偶然的出来事であれ自己選択した出来事であれ、そういった出来事がBさんの人生に危機をもたらす際、Bさんは内省を反復するなかで、忘却された矛盾を認識して創発の作動に至るが、自己物語論の視点によれば、そこにはまだ忘却され続ける矛盾も残されるからである。

以下、つぎのような流れで分析していく。便宜上、生活歴編集データにはデータ番号と見出しを付した。①見習い看護婦という生きがい(4-1節)(データ番号1~7)、②女手ひとつの子育てという生きがい(4-2節)(データ番号8~13)、③人生相談という生きがい(4-3節)(データ番号14~19)、④信仰という生きがい(4-4節)(データ番号20~24)、そして⑤生きがいの到達点の社協ボランティア(4-5節)(データ番号25~30)。

4-1 見習い看護婦という生きがい

4-1-1 宗教規範とジェンダー規範の内面化

【1】生い立ち

1928年、地方都市のL市にて生まれた。

両親と兄に囲まれて育った。他にも姉たちが5人いたが、私が生まれた頃には、皆奉公に行っていた。だから大家族で暮らした経験はない。末っ子で人形のようにかわいがられた。

両親は宗教家だった。Y教では、人間の肉体は神様からの借り物。神様が人間を作った。だからキリスト教と共通する点もある。病気になっても熱心なお勤めをすれば神様が治してくれる。すがりたい人はすがっていた。

あいさつをしないと、父にすぐ怒られた。……〔中略〕……母は、黙々と周りのことを気遣っていた。母からはボランティアという概念を教わった。6歳のとき初めて肺結核の人の家に母と訪問した。その家には父親はいたが、いつも酔っ払っていた。そこへ食料を運んであげた。

お客さんが家に来ているとき履物をそろえないと母に怒られた。……〔中略〕……女の子だからこうしなさいとか言われなかった。女とか男とか、全然意識しなかった。

この記述から、Bさんが両親から厳しく躰けられると同時に愛情も注がれていたことがわかる。また、両親が宗教家であったため、Bさんの周囲には常に家族以外のお客さん、すなわち信者たちが出入りしていた。こういった対他関係から判断すると、Bさんは幼少期から公の領域にも触れる機会が多かったことがみてとれる。

注目したいのは、対自関係である。この頃は内省も創発も作動せず、Bさんは家庭環境をそのまま内面化していたと考えられる。

たとえば、性別役割のジェンダー規範を疑うことなく内面化していた。両親の性別役割分業を当然のこととして受容し、夫・父親の役割と妻・母親の役割を肌で感じ取っていた。

さらに宗教的価値に基づくボランティア活動も母親と一緒に、自然に実践していた。当時のBさんにはボランティア活動をしているという認識はなく、ナイーブなものであった。こういった経験は、Bさんにとって内面化された指針となっていた⁸と考えられる。

4-1-2 優位／劣位と快／不快

【2】尋常小学校時代

体操が苦手だった。……〔中略〕……でも本を読むことは好きだった。絵も好きだった。色の使い方など好きだったからだ。しかし芸術的なものは両親から教わらなかった。両親はそういうものを持っていなかった。

近所で子どもを折檻するおばさんがいた。電柱に縛りつけられているのをみた。見せしめだった。怖かった。両親は絶対にたたかなかった。

この頃のBさんは、両親との肯定的な関係を土台に、対他関係における比較を通して自己を描写している。比較の対象は、クラスメート、両親、身近な世間の人たちが発信する通俗規範である。Bさんは、対他関係のなかで優位／劣位を認識していた。また、「好き」「怖い」のような快／不快の感覚により、対他関係のなかで自己を形成しつつあった。

4-1-3 宗教への違和感

【3】父の死

1942年、14歳のとき、父親が亡くなった。兄たちが後を継いだ。

父の死は怪我が原因だった。Y教では病院に行かないで、信仰の力で治そうとした。そのなかで、兄たちが、どんなになっても病院に行かないと駄目だということで病院に行っ

た。退院したが、身体は動かなかった。家で兄が父用のベッドを作った。体位交換をする大変な介護だった。この年、私は高等科を卒業した。

Bさんは人生最初の危機を迎えた。父の死である。感情的な喪失感もあったと想像されるが、それ以上に、Bさんにとっては、これまで何となく感じていた宗教と医療のあいだの“矛盾”——忘却された矛盾——が露呈する出来事でもあったとの見方ができる。

Bさんは宗教への違和感について述べていない。しかし、対自関係において、父の怪我が信仰の力で治せなかったこと、病院に行けば父の怪我は治ると考えている兄たちの考えを知ったこと、この両者のあいだに存在する矛盾をBさんが内省したのではないかとの見方ができる。ここではBさんが宗教への違和感をもったと解釈した。

4-1-4 いじわるな兄嫁からの逃避

【4】見習い看護婦に

15歳のとき、28歳の兄が結婚し、兄嫁と同居するようになった。しかし居心地が悪く、早く家を出たかった。兄嫁はいじわるだった。……〔中略〕……家を出るためには、住み込みの仕事を見つけることが先決だと判断した。ある日、L市にある病院の玄関の前で、見習い看護婦募集のチラシを見つけ、飛び込んだ。これが原点かもしれない。父の死とは関係なかった。当時、看護婦と交換手は、軍事工場への勤労奉仕を免除された。それで看護婦にした。

この頃から、自分というものがあつた。自分で決めた。病院に行ったというのは不思議だった。自分の意志を貫き通すことを、周囲

から頑固だと言われた。母に伝えたら、病院だったら1つの上流社会だから安心、とのことだった。母も兄も賛成だった。

【5】L市から都会へ

1944年、私が16歳のときも、兄嫁からいやがらせを受けていた。兄は、味方になってくれなかった。そこで姉を頼って、都会に出た。兄嫁と一緒に住みたくなかった。都会では個人病院に見習い看護婦として住み込んだ。

母はかなり驚いた。「明日、家を出て病院で働きます」と言ったら、みんな驚いた。今までは親に反抗したことはなかった。しかし、このときは初めて反抗した。

都会で勤めた病院は外科系だった。夜も昼もなかった。24時間体制。……〔中略〕……即戦力として、手術場に借り出された。

Bさんは進路として看護師を選択した。第1の理由は、否定的な対他関係であった兄嫁からの逃避である。これは感覚的なものである。さらに、「軍事工場への勤労奉仕を免除」されたいからだ。これらはいずれも不快なものからの逃避といえる。

Bさんが看護師を選んだ第2の理由は、宗教では説明できない何らかの要素が、医療の世界には存在すると考えたとの見方ができる。自己内にある宗教と医療の矛盾に決着をつけたいという志向性——忘却された矛盾の内省——がみとれる。宗教を凌駕していると感じられた医療に関われば、見習い看護婦としてさまざまな要素を自己内に取り込むことができる。そういった欲望が、家を出て、見習い看護婦になるというBさんの行動につながったと考えられる。

2つ目の理由については別の見方も可能かもしれない。なぜならBさんの語りに忘却され続ける矛盾が捕捉できるからだ。Bさんは、看護師になる理由について「父の死とは関係なかった」と語る一方、「病院に行ったというのは不思議だった」とコメントした。だが、ここではインタビュー時のBさんが「自分というもの」をもってたと振り返っており、看護師になることを「自分で決めた」と語ったことに注目した。ただし常に母の支えがあったことは重要である。「見習い看護婦」になるという選択を母が後押ししてくれたからだ。

4-1-5 初めての経験と新しい環境

【6】初恋

初恋をしたのはこの頃だった。相手は医大の学生だった。その人にあこがれた。身長も高かった。みんなに冷やかされた。その気持ちを、どう抑えるかを真剣に考えていた。当時は、見習い看護婦と医学生の恋愛は決してありえなかった。その人がそばに来るとウキウキした。嬉しくなって、何でもしてあげようという気持ちになった。

【7】看護婦としての寮生活

いい先輩と出会えた。何でもよく教えてくれた。また、たとえ嫌だと思ふような人からも、何かを得ていた。何かを学んできた。生理のことも、寮生活のなかで、先輩たちにも同じようなことがあることを知った。先輩たちのやりとりを聞いていると、「ああ、生理はいいことなんだ」と思えるようになった。

寮生活は、母が身近にいないという点でBさんにとって大きな変化であった。新しい環境で、初恋や生理という初めての経験をした。そ

の際、Bさんは、対他関係において、寮の先輩たちとの交流で理解した。新しい環境に慣れるため、対自関係においては実家での経験を比較の基準にしながら多くのことを学んでいたと思われる。

4-1-6 小括

見習い看護師という初めての生きがい獲得に至らしめたのは、否定的な対他関係にあった兄嫁からの逃避と、父の死による宗教への違和感であったとまとめた。Bさんは、第1に兄嫁からのいじわるや勤労奉仕という“不快な状況”から押されるかたちで、第2に“宗教を凌駕する医療への好奇心”から看護師という職業に希望を見だし、引っ張られるかたちで、Bさんの生きがい獲得に寄与したとまとめておきたい。

4-2 女手ひとつの子育てという生きがい

4-2-1 ジェンダー規範と宗教規範

【8】不安な結婚の始まり

1950年、22歳になって結婚することになった。相手は、1年年下の21歳だった。本当に幼い2人だった。看護婦を辞め、専業主婦になった。

しかし、結婚して間もなく、1年もたたないうちに、「結婚ってこんなもんかなあ、これじゃあ、長続きしそうにないなあ」と感じ始めた。夫はお酒ばかり飲んでいて、家にお金を入れなかった。このことによって、いつも精神的に不安定だった。しかし人間は変わるもの。いつかは夫も変わってくれると信じるほかなかった。周りは、「ちゃんとしていれば、きっと夫も変わってくれるよ」とアドバイスしてくれた。

【9】妊娠と出産

子どもを4人、しかもすべて男の子を生んだ。長男は1951年、23歳のとき生まれた。何もかもが初めての経験だった。同じ年に姉2人と兄嫁が妊娠した。特に姉は、妊娠のことに詳しくかったので、いろいろとアドバイスしてくれた。だから安心だった。

次男は2年後の1953年、25歳のとき、三男はさらに5年後、1958年、30歳のとき、そして最後の子どもである四男は、1961年、33歳のときだった。次々に子どもが生まれた。正直いって妊娠が恐かった。経済的な不安もあった。しかし神を信じていた母は、家族計画を否定していた。だから仕方なかった。

Bさんは社会常識にしたがって「看護婦を辞め、専業主婦に」なった。この経緯についてBさんは詳しく説明していないが、当時は、結婚したら女性は仕事を辞めるということは常識であり、ジェンダー規範であった。Bさんもこの慣例に従ったと思われる。

しかし夫はジェンダー規範を無視し、家庭内で夫役割を果たさなかった。当時のBさんは夫がジェンダー規範に従ってくれるのを待つしかなかった。なぜならBさんが出産と育児で多忙な身となったからだ。何とか現状を変えようとして母や姉に相談していた。それでも現状が変わらなかったため、Bさんは苦悩していたことが記述からわかる。

さらに宗教規範と家族計画のはざままでBさんは次々と妊娠し、出産と子育てに追われていった。母の意向からBさんは宗教規範を受け入れるしかなかった。

つまり対他関係では、否定的な夫と肯定的な母と姉のなかで堂々巡りし、対自関係では、ジェンダー規範と宗教規範の両立に苦悩し、内向

的になっていた様子がみてとれる。

4-2-2 反復的内省による気づき

【10】男の役割、女の役割

結婚前、誰にも教わらなかったが、家庭をもったときの男と女の役割を知っていた。時代は、戦後の自由主義思想だった。そんななかでも男は外、女は内という考え方をもっていた。しかし、夫にはそういう考えが全くなかった。妻として母として、子育てをし、家のなかを守った。しかし、夫は家族扶養義務について知らないようだった。

結婚した以上、女の役割に没頭しようとした。しかし、夫は、男の役割を果たさなかった。そこで気づいた。そうでなくてもいいと。別に型にはまることはない。夫が外で働いてくれないだったら、妻である自分が外で働いたっていいんだ。そう思った。夫は最初のころは、言うことを聞いてくれていたが、次第に「俺に命令するのか！ そんなことは女のやることだ！」という感じであった。夫は家にお金を入れてくれなかった。女であるよりも母親でありたかった。1959年、31歳のとき、夫との関係を清算したくて悩み続けた。苦しくて死のうと思った。

Bさんの悩みは、夫が「家族扶養義務」を果たさないから、自分も「女の役割に没頭」したくても没頭できないという葛藤であった。これは夫役割の規範と現実のあいだの矛盾である。この矛盾を解消しようとしてBさんは内省を繰り返していた。

この反復的内省では、2つの段階を経ていると考えられる。1つは、この矛盾を解消するために、母や姉といった身近な他者の助言を自己に取り入れようとした段階、もう1つは内向的

な状態になり、そういった助言を自己に取り入れられない段階である。

こうしてBさんは自己を閉鎖して内向的な状態にしたうえで、すなわち母や姉など他者の助言を取り入れないようにしたうえで、対自関係において矛盾と向き合い、死のうと思うほどに内省の作動を活発にしていたのではないか。最終的にBさんはジェンダー規範の「型にはまることはない」と「気づいた」。この気づきを本稿では創発と解釈したい。

4-2-3 反抗と自己肯定による創発

【11】生き別れの離婚へ

3年間悩み続けて、結局、離婚することを決意した。1962年、34歳のときのことだった。

離婚を決意したのは、主に、子どものことを考えてのことだった。最大の理由は、子どもの成長と関係があった。お金を家に入れず、家のなかでなら何をして自分の勝手だという父親と、それによって精神的に不安定な母親に育てられても、かえって子どもの教育に悪影響が出ると判断した。当時の子どもたちの年齢は、上から11歳、9歳、4歳、1歳だった。

12年間の結婚生活を振り返って、つぎのことを決意した。それは、「決して愚痴を言わない」ということだった。何でも前向きに考えようと決めた。後ろのことを振り返って、それをバネに、前に行こうと決めた。どんな苦しさがあっても1人でやっつけようという信念がわいた。

離婚について、実家の兄弟たちには理解できないと思った。兄たちに、お金を借りたわけでもなかったし、お米を借りたわけでもなかった。でもひどく責められた。それでも反抗した。自分の生き方は、自分が決めるとい

うものだった。これが最大の反抗だった。兄からは、「女が1人で食べていくには、体を売らないと無理だ。お前は何かができるんだ！」と言われた。そんなことはしないと強く思った。

そんななか、母だけは支えてくれた。母には謝った。当時、離婚というのは、とにかく女が悪いということだった。母には結構支えてもらったが、深いところは話さなかった。心配させるだけだから。結局は、問題を解決するのは自分だったから。

女手ひとつで4人の息子たちを育てるという生きがいをもったBさんは、対他関係に振り回されないようにした。なぜなら「1人でやっていこう」と決意したからだ。これについて「最大の反抗」であったとインタビュー時にBさんは回想した。対他関係において特に兄から言われた「体を売らないと無理だ」という否定的コメントはBさんに「どんな苦しさがあっても1人でやっていこうという信念」を付与したと考えられる。

他方で、Bさんの対他関係において肯定的存在もあった。母である。Bさんが自己決定をした“離婚”と“女手ひとつの子育て”という決断を「母だけは支えてくれた」とはいえBさんは、母にも「深いところ」は話さなかった。「結局は、問題を解決するのは自分」であると認識していたからだ。しかし母という肯定的存在は、Bさんに自己肯定感をもたらしたと考えられる。

このように、女手ひとつの子育てという生きがいの獲得に至る際、“肯定”と“否定”という対他関係が、Bさんに信念、決意、自己肯定感を付与し、既存のジェンダー規範における忘却された矛盾への“気づき”をもたらしたとの

見方ができる。

4-2-4 内向的な状態と内省

【12】再び看護婦へ

1962年、34歳で離婚したとき、看護婦寮に入居した。そして生計を立てるため、再度、看護婦として働き始めた。

年上の人にも、年下の人にも、丁寧な言葉遣いをしようと決めた。それが、あるときは固いと言われた。患者に対して、受けはよかった。

結婚前は、なんとなく取得した看護婦の免許だったので、実際には使い物にならなかった。そこで、もう一度看護婦としての、専門的な知識を学習し始めた。猛烈に勉強した。このとき子どもたちは夫のところに居た。だから必死だった。何とか安定した生活をして、子どもたちを呼ばないといけない、と思った。

頑張りすぎたせいか、看護婦として働き出してから1ヶ月で、ダウンした。腎炎だった。離婚による激しい精神的疲労と、離婚後の過労による疲れだろう。しかし、入院中もいい時間ができたと思って、看護婦としての専門知識の暗記に励んでいた。

既存のジェンダー規範を突破し、女手ひとつの子育てという生きがいを得たBさんは、生き別れの離婚を実行して、看護師に復帰した。そこで「看護婦寮に入居」した。対他関係が大きく変わることになり、Bさんは新しい環境に身を置くことになった。

生きがいを獲得する際、Bさんは規範を突破することにより、楽になった。その際、Bさんは、自己を内向的な状態にすることを学習したと考えられる。この内向的な状態はBさんに内省を与えるだけでなく、苦悩から自己を守る

機能も付与したといえる。

たとえば「年上の人にも、年下の人にも、丁寧な言葉遣いをしようと思った」。これは他者との間に境界線を引く行為である。さらに丁寧さは自己の尊厳を確保し、自己肯定感につながると考えられる。

Bさんの生きがいは、“女手ひとつの子育て”となった。以前生きがいがだった看護師は新たな生きがいを支える重要な手段となっていた。看護師としての猛烈な勉強は、離婚後、子どもたちと一緒に暮らすという目標があったため可能となったと考えられる。

4-2-5 反復経験によるパターン学習

【13】母子寮での生活

四男以外の3人の子どもたちと一緒に母子寮に入った。そこには同じ境遇の人がいた。定職がないため、夜、子どもを置いて働きに行くお母さんもいた。病気のお母さんもいた。障害者で、家で内職をしているお母さんもいた。だから、定職があって給料がもらえたことは、本当に有難かった。

四男は乳児院で育っていたから言葉が出なかった。歩くのがぎこちなかった。2歳3ヶ月で、靴を履いても歩けなかった。施設で育つということがいかに遅れるかを実感した。でも家には兄たちが3人も居たから、みんなではしゃいで、チビちゃんをみんなでなだめたり、一緒に手をつないだりした。そのうちに成長した。

このとき自分のことだけで精一杯だった。周りが見えなかった。がむしゅらに働いていた。

近所に夫婦で身体障害の人がいて、助けてあげたことがあった。具合が悪くなったとき、子どもを抱いて、リアカーで病院へ運ん

であげた。自然にできた。それは、両親のやっているのを見ていて身につけていたからだった。民生委員さんに感謝された。

再婚する気は全くなかった。縁談はきた。長男が中学校に入って、下の子が小学校に行っていたとき、子どもたちの年齢が13歳、11歳、6歳、3歳のとき、再婚するかどうか聞いてみた。でも子どもに嫌だと言われ、その縁談を断った。

この生きがいを遂行する際に、Bさんは、母子寮という新しい環境において、看護婦寮とは異なる対他関係において、自分と同じ境遇の人たちと出会った。そして他者と比較して、自らの置かれた状況について、優劣により位置づけていたことがわかる。「定職があって給料がもらえたことは、本当に有難かった」と認識して、自己の状況を優位に位置づけている。他方で、四男については「施設で育つということがいかに遅れるか」と実感し、自己の状況を劣位に位置づけていることがみとれる。

こういった新たな対他関係における優劣による位置づけは、看護婦寮という過去の経験が活かされ、Bさんに反復経験によるパターン学習を促したとみとれる。

4-2-6 忘却され続ける矛盾

ところで「女であるよりも母親でありたかった」という価値観を掴み取ったBさんに、迷いはなかったのだろうか。

34歳のBさんが離婚した1962年という高度経済成長期には、近代家族が主流であった(落合1994; 山田1994)。ゆえに周囲が再婚を勧めるのは当然であった。再婚を勧められたBさんは、再婚しても母親業を優先することが可能であると認識していたであろう。むしろ世間か

【16】父親の役割と母親の役割

女手1つで、息子たち4人を育てた。だから内では母の顔、外では職業婦人の顔だった。中性になっていた。女だからダメだというレッテルは間違っている。男だってダメなのはあるから。

しかし子育てのとき、子どもが何か悪さをして叱るときは、母親だからそこまで言えたのか、あるいは父親だったらそこまでは言わなかったのか、わからなくなるときもあった。

子どもたちに結婚の重さをつぎのように教育した。男というのは、将来、お嫁さんをもって家庭を作ったとき、大切な役割がある。家族が経済的に困らないように、ちゃんとした仕事に就かないといけない、と。これは自分の経験から出てきたことだった。ただし、女だからお嫁さんは家にいなければならないとは言わなかった。

子どもたちは、看護婦として働く母の姿を見て、誇りに思ってくれていたようだった。あとから、子どもたちの学校の先生から聞いた。うれしかった。

Bさんにとって母の死は「本当にショック」な出来事であった。まだ離婚したばかりのBさんは人生最大の危機を迎えていた。対他関係における人生の支えを失ったからだ。母の死は、離婚という人生最大の危機とセットになって、Bさんを襲った。

しかしBさんは“職業婦人”と“シングルマザー”の二足の草鞋を穿く状態であり、対自的に内省する時間が確保できなかったとも考えられる。Bさんが1人2役、すなわち父親と母親の両方の役割を果たそうと、必死になっていたことが記述から読み取れるからだ。

子どもたちへのジェンダー規範については、家庭をもったときの夫役割について「家族が経済的に困らないように、ちゃんとした仕事に就かないといけない」と教育した。しかし、Bさんは「女だからお嫁さんは家にいなければならない」とは、息子たちに言わなかった。つまりBさん自身の価値観や生きざまを否定しないかたちで、一般常識を身につけた大人へと、子どもたちを育て上げようとしていた。ここには確かに矛盾がある。その矛盾とは、夫は稼ぐという既存のジェンダー規範と、妻も稼ぐという新たなジェンダー規範の間のものである。

しかし既存のジェンダー規範を突破したあとのBさんにとっては既存のジェンダー規範も新たなジェンダー規範も、“女手ひとつの子育て”であるからこそ可能となるような、“止揚”された価値観として認識されていったと考えられる。

ひとり親のせい子どもたちに嫌な思いをさせたことがあったのだろうか。Bさんはこういったひとり親世帯への差別に“反抗”していた。同時にまた、息子たちが自分のことを評価して“受容”してくれていることに励まされてもいた。「看護婦として働く母の姿」を誇りに思ってくれているということを知ったからだ。

このようにBさんの生きがいである“女手ひとつの子育て”の実践は、既存のジェンダー規範への“反抗”と、対他関係としての身近な他者からの“受容”により成立していた。ここには確かに矛盾を孕んでいるものの、——換言すれば、“忘却され続ける矛盾”を抱えつつも——しかし、対自的には創発の作動があったと小括しておく。

4-3-2 再生力集団からの受容

【17】母子会の理事

1967年、彼女が39歳のとき、家族で母子寮を出て市営住宅に引っ越した。

またこの頃、母子会で地区の理事になった。素晴らしいと思った人がいた。理事のリーダーの方だった。自立していて、物事にとらわれない方だった。自立というのは、自分の人生の目的をきちんともっているような人。人から影響を受けても、自分をもちながら、影響を受けない。こだわらない人だった。経済的な自立が土台だった。戦争未亡人だった。……〔中略〕……また、別の素敵な女性がいた。母子会の理事の事務局をしていた。その方に教わったことは、会議の仕方、資料の作り方、根回しの仕方等だった。

当時、離婚をするということは、余程女が悪いという社会認識があった。また、“生き別れ”と“死に別れ”は、天と地ほどの差があった。圧倒的に社会の目がやさしいのは、死に別れだった。生き別れというのは、ごく少数しかいなくて、かなり社会的な差別を受けた。理由は、女がわがままだということだった。当然、自分の場合は、生き別れだったから、無言の圧力は想像を絶するほどだった。

そんななか、「これからは女性の時代。これからの時代は、死に別れより、生き別れが多くなる。そのとき、生き別れの経験者が理事にいたほうがいい」ということで理事になった。組織も、これからは生き別れが多くなるということを主張した。女性の社会的地位向上のことを言った。このとき、よく周りから“とんでいる”と言われた。この頃は、“とんでいる”という言葉が流行っていた。

母の死から4年後、Bさんは「家族で母子寮を出て市営住宅に引っ越し」、母子会の理事を引き受けた。子どもたちは16歳、14歳、9歳、

6歳となり、末っ子の四男も小学校に通うようになっていた。

母子会の理事の活動のなかで、Bさんは目標にしたいような女性たちと出会っている。

インタビュー時のBさんの内省的な語りから、既存のジェンダー規範との折り合いが悪い際、少なくとも2つの選択肢があったと解釈できる。1つは、矛盾に対して対自的に違和感をもち、忘却された矛盾を解消しようとして対他関係を排除するものである。もう1つは、これと正反対で、忘却され続ける矛盾を抱えながら、対他関係において既存のジェンダー規範を受け入れようとするものである。

しかしBさんは両者を選択肢と捉えずに“止揚”した。それは「人から影響を受けても、自分をもちながら、影響を受けない」というやり方——すなわち対他関係を排除しつつもこれを受容する姿勢をとるというやり方——である。これは目標としたい自立した女性たちへの憧れをもとに実行された。

こういった手本となるような自立した女性たちの存在は、Bさんにとって複数の対他関係から“受容”される機能を果たしていた。この意味で、母子会の理事を務めていること自体がBさんの心の支えとなっていたと思われる。当時「想像を絶するほど」の圧力であった離婚による差別に対して、Bさんが打ち勝とうとする際に、この複数の他者からの“受容”は彼女の尊厳の維持に寄与したと想像できる。

この「想像を絶するほど」の既存のジェンダー規範圧力への“抵抗”と、目標にしたいと思える複数の自立した女性たちからの“受容”が、Bさんの生きがいを“女手ひとつの子育て”から“人生相談”へと変容させるための創発を作動させたこと本稿では解釈した。Bさんが新たな生きがいを得るに至ったのは、対他関係にお

いて“抵抗”する対象と“受容”してくれる対象が存在したから、という説明である。

とりわけ後者の“受容”してくれる準拠集団は、同志である他者と「つながっている感覚 (Sense of Connection)」(Schachter-Shalomi and Miller 1995: 260)、すなわち「制度化された集団」としての母子会の一員であるという感覚をBさんに喚起したと考えられる。これは「コミュニティの感覚 (Sense of Community)」であり、「再生力集団 (Regenerative Community)」(Barkan 2003)としてBさんの生きがい遂行に寄与していた。

4-3-3 自己選択した他者

【18】人生相談

1968年、40歳くらいから、いろんな人から人生相談を少しずつ受け始めた。離婚していたから、できた。離婚していても、もし愚痴ばかり言っていたらこんなことはできなかった。これから、夫と別れようとする人からも相談がきた。誰か受け止めてくれる人がいるということは、生きる喜びを与えてくれると感じた。これは30年続いた。アドバイス嫌がって去っていった人もいた。

【19】支え

ちょうどこの頃、仕事で一番つらかったときに読んだ本のなかで印象的だったのは、『徳川家康』18巻だった。1年半かけて読んだ。そして、徳川家康の人生観というか、そのときそのときの対応の仕方を学んだ。こういう偉大な人は、つらいことをこういうふうにして乗り越えていったのかということがわかった。……〔中略〕……納得できることが多かった。

人生相談という新たな生きがいは、さらにBさんの内省をパワーアップさせた。なぜならBさんが他者の人生相談を受けることにより、自らの悩みが“相対化”されたからだ。これまでのBさんは自分自身の悩みを「観察する」視点、すなわち“当事者の視点”で苦悩し続けてきた。しかし、今度は、相談者という他者自身の悩みの「観察を観察する」(Luhmann 1990=1996: 231)機会が、人生相談を受けることによって与えられたのだ。

こういった観察を観察する視点は、Bさんに大きな変化をもたらした。これまで「結局は、問題を解決するのは自分」であると考えてきたBさんは、「1人でやっていく決意」のもと、あらゆることを1人で乗り越えてきた。しかし人生相談を受けるという新たな生きがいの遂行を通して、他者と悩みを分け合うことも、苦悩から解放され得ると知るに至った。これはBさんの対他関係の範囲が、身近な他者のみならず、たとえ身近でなくても“自己選択した他者”にまで拡大されたことを示す。

ここで“自己選択した他者”について触れておきたい。Bさんは人生相談に応じるなかで様々な他者と出会った。しかし、記述からわかるように、すべての相談者がBさんのアドバイスを受け入れたのではない。そこでBさんは他者というものが一枚岩ではなく、色々なタイプの他者が存在することを認識するに至ったのではないか。この生きがいを遂行する際、相談者という対他関係において、助言の受容と拒否という事態を経験したと思われる。その結果、たとえ身近な他者でないとしても、受容してくれる他者を自己選択すればいいとBさんが対自的に気づいていったところでは解釈した。

他方でBさんの内省は、読書という行為に

よっても作動していた。『徳川家康』18巻」である。Bさんは読書を手段にして、自己選択した他者を志向した。「こういう偉大な人は、つらいことをこういうふうにして乗り越えていったのか」と共感し、自らの現実には当てはめて内省を作動させていた。これも、Bさんの対他関係の範囲が、「空間としての環境」のみならず、「歴史的な時間も視野にいられた環境」へと拡大したとの見方ができる。

4-3-4 小括

対他関係において、最大の理解者であった母を失い、ひとり親世帯への差別に抵抗しながら、「女手ひとつの子育て」を遂行していた時、Bさんは矛盾の渦中にあった。それは男性役割と女性役割の間の矛盾である。しかし職業婦人と母親業の二足の草鞋を穿くことについて、子どもたちから受容されて、Bさんは自己肯定していた。

さらにBさんは母子会という「制度化された集団」に所属し、理事になった。離婚という経験があったからこそ、この役目を務める機会を得た。母子会はBさんに、自己を内向的な状態にするばかりでなく、自己選択した他者を志向することを教えてくれた。「コミュニティの感覚」をもたらし、「再生力集団」として、Bさんの支えとなった。

Bさんは、“人生相談”を受けるという新たな生きがいを獲得した。その際、母子会というコミュニティからの受容と、離別者への差別に対する抵抗が存在した。加えて、人生相談を受けることで、身近な他者だけでなく、空間的にも時間的にも規定されない自己選択した他者を受け入れる体勢が可能となった。Bさんは、内省の作動により、他者の人生の悩みをフィルターにして自らの人生の悩みを“俯瞰”していた。

つまりBさんは、人生の悩みを直接的に“観察する視点”のみならず、その人生の悩みの“観察者を観察する視点”をも手に入れたと考えられる。本稿では、こういった自己の“相対化”、“止揚”、“俯瞰”、“観察者を観察する視点”等を創発の具体的な中身であると考えたい。

4-4 信仰という生きがい

4-4-1 内省の鍛錬

【20】仕事場での人間関係

看護婦をしていて苦労したことは人間関係だった。少し年上の同僚には、本当に苦労させられた。毎日、婦長室に行って、「もう辞めます」「給料はいりません」と言って泣いた。この頃から、教会に通い始めた。

【21】看護婦として転職

47歳のとき、1975年に、今まで勤務していた病院から、別の病院に転職した。それは人間関係に疲れたためだった。……〔中略〕……その先輩には、普段からいじめられていた。そのいじめにも負けず、勤務していたので、先輩はその腹いせに辞めたらしい。とにかく、こういった経験を通して、人間関係の難しさを、肌で感じ取った。対抗してくる相手に、どんなふうに接したら、相手の気持ちがおさまるのか、考えた。14年間勤めた病院で、辞めたいと言ったとき、周囲の人は、誰も本気に信じなかった。子ども4人抱えていたから、そう簡単には辞められないと踏んでいたからだ。

【22】新しい職場

しっかりとつぎの職場を探して辞めた。それはJ刑務所の医務だった。仕事内容は、収容者と職員の健康管理と疾病患者の治療と介

助だった。……〔中略〕……一般の病院と比べて特殊な点は、収容者の行動に自由がないことだった。

Bさんは、30年ほど前にも兄嫁からいじめを受けた。このときは家を出たが、しかしながら今回は、対自的に、人間関係の難しさに忍耐し続けていた。対他的にみても、子どもたちを経済的に扶養する必要があるため、仕事を辞めるわけにはいかなかったためだ。つまり30年前と違い、今回は、否定的な対他関係である先輩によるいじめから逃げなかった。なぜなら“女手ひとつの子育て”という生きがい、そして“人生相談”という新たな生きがいの遂行があったからだ。肯定的な対他関係としては、母子会という再生力集団がBさんの拠り所となっていた。

結局、Bさんは転職することにしたが、新たな職場においても、内省と創発が作動した。なぜなら、閉鎖的な世界である刑務所において、複雑な事情から犯罪に至った囚人の事例を知ることが、これまでの人生を総括する手段として、Bさんに作用したと考えられるからだ。Bさんは閉鎖的で小さな刑務所を、開放的で大きな社会のミニチュア版として把握することによって、内省と創発を鍛錬していたとまとめておきたい。

4-4-2 宗教も医療も

【23】後々の信仰とつながる出会い

1970年、42歳のとき、Bさんは風邪を引いて入院した。

看護婦として勤務していたとき、入院患者さんで、素敵な女性がいた。……〔中略〕……入院中も、看護婦のいうことや医者のいうことをきちんと聞いていた。深く話したら、

その方はカトリックの信者だった。キリスト教的な患者さんとの出会いだった。

【24】宗教

転職してつぎの年、人生に悩み、プロテスタントのキリスト教に入信した。刑務所にいる人も、同じ人間だと感じるようになった。自分だって、もしかしたら入っていたかもしれない。離婚のとき、夫の首を絞めようとしたのだから。

この頃から、物事にとらわれなくなった。どんな人も、同じだと気づいた。皆ある一定の人生を歩めば、死が待っているということが理解できた。自由になった。

Bさんは、刑務所という特殊で閉鎖的な施設において、医療に従事しつつ、「キリスト教」という宗教の世界にも関わるようになった。“宗教か医療か”ではない。“宗教も医療も”Bさんの生きがいに包摂されていった。

こうしてBさんは、新たな生きがいとして“信仰”を得た。Bさんは宗教に関わるようになってから、「物事にとらわれなくなった」とコメントした。あらゆる人間に「死が待っている」ことを改めて確認できたからだ。

死には、少なくとも、医療的な側面と宗教的な側面がある。幼少期のBさんは、父の死により、それまでは所与であった宗教的な側面に違和感をもち、看護師という医療的な側面に関与していった。しかし中年期のBさんは、看護師としての経験により、死について、宗教と医療の両側面を止揚するに至っている。ここには、内省の作動による止揚があったと考えられる。このことが、Bさんに「物事にとらわれない」という対自関係における個性をもたらしたとまとめておく。

4-4-3 小括

いじめによるつらい退職、そして新しい職場への転職を経験して、キリスト教への入信により、Bさんは新たな生きがいである“信仰”を得た。この信仰という生きがいは、Bさんに、これまでの対他関係において、すべての人間に死が訪れるのだから人間はすべて同じだという認識をもたらした。また、信仰という生きがいは、これまでの対自関係において、人生のゴールがみえたときの内省の仕方を変容させた。それは、医療的な死と宗教的な死のあいだの矛盾を、あえて“忘却され続ける矛盾”に据え置こうとするものであり、「物事にとらわれない」という認識である。対自関係においても、対他関係においても、人生が終わればすべての人間の苦悩も喜びも無くなるのだから、それまでの時間で、既存のジェンダー規範や常識にとらわれる必要はないのだとBさんに“気づき”を与えたわけだ。この気づきがBさんに自由をもたらしたと、ここでは小括しておく。

4-5 生きがいの到達点の社協ボランティア

4-5-1 精神的充実と身体的老衰

【25】リタイアと身体の変遷

1988年、60歳でリタイアした。その後は、今までやりたかったことを、思い切りやった。たとえば、カルチャーセンターに通ったり、旅行をしたり、おいしいものを食べたり。ただ、おいしいものを食べすぎたせいか、1992年、64歳のとき、糖尿病になってしまった。そこで健康管理には十分気をつけるようになった。

自分の身体のことを「病気あつての自分」と思っている。つまり、糖尿や腰痛、関節痛等、あっちこっち病気があるが、70年も体

を使っているから、痛いところがあるのが当たり前。自分が納得すればそれでいい。病気あつての自分だ。病気と心は違う。

リタイア後、Bさんは糖尿病になってしまう。しかし看護師だった経験から独自のやり方でこの危機を乗り越えようとした。看護師だったBさんは、医療の世界で、長年にわたり、多くの人々が病気にかかって大変な思いをしているのを散々みてきた。その経験から、Bさんは「病気と心は違う」と認識していた。つまり、Bさんは糖尿病という病気により身体的自由が失われるとしても、精神的自由を確保できると考えていたことがみてとれる。

【26】充実した毎日：忙しいから寂しくない

社会福祉協議会にボランティアとして登録した。せっかく母子会でいろいろ身につけたから、何か社会の役に立ちたかった。

現在、毎日充実した生活を送っている。寂しさはまったくない。……〔中略〕……このようにできる理由は、離婚して普通の主婦とは違う生活をしてきたからだ。普通の主婦と違って、とんだりはねたりしてきた。自由でいたい。

同年代のおばあちゃんの話についていけない。……〔中略〕……くよくよ考えたって仕方がないのに、と思ってしまう。ポリシーは相手のことを理解しながら、踏み込まないことだ。分かり合いながらも、奥までは踏み込まない。

癖は、警戒すると言葉遣いが丁寧になることだ。やっぱり構えてしまう。自分のことを素直にみてくれないと感じたとき、言葉遣いが丁寧になる。

ここからわかるように“社協ボランティア”は、インタビュー時のBさんの生きがいとなっていた。この生きがいは、Bさんが母子会の理事をしていた経験を含め、これまでのすべての生きがいの集大成であり、かつ到達点であるといえる。同時にBさんは何よりも自由を重んじていることも記述から読み取れる。

Bさんにとっての自由とは何であろうか。生活歴編集データからは、精神的自由、すなわち“精神的充実”を意味していると解釈できる。たとえ要介護状態になって“身体的老衰”に見舞われるとしても“精神的充実”は確保したいという認識である。身近な同年齢の知人たちをみていると、寂しいという理由で他者に依存しているため“精神的充実”は得られていないとBさんは捉えている。

このようにBさんは「自由でいたい」という欲望をもっている。しかし自己中心に陥らないために対他関係も大事にしようとしている。自己を守りつつも他者とも共生するためにBさんはある人生哲学としての「ポリシー」に辿りついた。それは「相手のことを理解しながら、踏み込まない」というものであった。これは所与ではない。Bさんが人生をかけて掴み取ってきた知恵である。

4-5-2 生きがい獲得の到達点

【27】振り返り

年を重ね、体も心も弱ってきた。そういうとき、過去を振り返ってみて、いやなことが今の自分の栄養になっていると思う。いやなことは忘れられない。でも、いいことはすぐに忘れてしまう。受けたいじめ等を許せるようになった。これはキリスト教のおかげ。考え方を变える訓練になっている。たとえば、

別れた夫に対しても、子どもの存在は夫のおかげでもあると思えるようになった。考え方を变えると、すべての出会いに感謝できるようになった。離婚のときの状況を考えたら、今は幸せの絶頂だ。

【28】子どもたちとの関係

子どもたちも、分別のある立派な社会人に成長している。自立している。よく子どもたちに「お母さんは、こうして元気であるでしょ。あなたたちに子ども孝行しているんだよ」と言っている。すると子どもたちは「わかっている。でも具合が悪くなったら、知らせなきゃダメだよ」と言う。義娘たちとの関係もうまくいっている。

【29】もし認知症になったら

ボランティア活動の一環として、特養に入りしている。そのなかで認知症高齢者をみていると、いつか自分もなるのかなあ、と将来を考える。ただそうなったときの計画を立てておきたい。将来的なヴィジョンをしっかりともっていたい。

【30】“わがまま”ではなく、“我が(在るが)まま”に

よくぞ、ここまで長生きできた。もっと弱い人、障害をもっている人のそばに、ただ一緒に居てあげることができたらいいなあ。おせっかいかもしれないが、そう思う。

昨年も、縁談があった。でも断った。……[中略]……健康状態もよくなってきたら、相手の介護をしなければならなくなる。それで時間がとられるなら、いっそ自分1人がいい。

インタビューを実施した当時のBさんは、生きがい獲得の到達点として、どのような状態に至っていたのか、考察したい。

第1に、Bさんが対他関係を選択していることが分かる。自己を危機にさらすようなものに対しては、内省を作動させて「ぴしゃっと断って」いるが、同時に、対他関係を開放して「周囲への配慮」も忘れない。

第2に、Bさんは、対自関係において、内省の作動により、これまでの人生で出会ってきた“不快”を“快”に変換していた。たとえば「いやなことが今の自分の栄養になっている」と総括したり、「受けたいじめ等を許せる」ようになったと認識したりしていた。「別れた夫」に対してさえも、「子どもの存在は夫のおかげ」と語っている。つまり「いじめ」や離婚した夫という否定的な対他関係を、感謝という肯定的要素に変化させていることがみてとれる。究極的には「すべての出会いに感謝」しているとBさんは内省している。

第3に、Bさんは肯定的な要素だけを自己の内部に取り込み、そうでない要素は排除していた。たとえば成人した子どもたちとの関係について、「分別のある立派な社会人に成長」し、「自立」していると認識していた。また「義娘たちとの関係もうまくいっている」と話した。ここでは、客観的にみて子どもたちとの関係がうまくいっているかどうかよりも、Bさんが主観的にみてこれを肯定的要素とみなしていることを重視した。

第4に、避けられそうにない望ましくない事態については、備えを万全にしようという志向性も確認された。認知症には「いつか自分もなるのかなあ」と思い、否定的要素を予期して、これに対応できるよう「将来的なヴィジョン」を明確にもつ。なぜなら、認知症になると自由

が失われる危険性があるからだ。

しかし、ここで興味深い点として“忘却され続ける矛盾”を指摘できる。一方で、「もっと弱い人、障害をもっている人のそばに、ただ一緒に居てあげることができたらいい」と考えているが、他方で、再婚については「相手の介護をしなければならなくなる」として断っている。この矛盾についてBさんは自分の「わがままさ」を理由に挙げていた。介護で「時間がとられ」、束縛され、自由な時間が奪われること、すなわち自己が守られない状態に陥ることを避けたいと思っていると解釈できる。ここに利己的と利他的という“忘却され続ける矛盾”がみてとれる。

4-5-3 小括

Bさんは誰からも束縛されないかたちで、ボランティア活動という生きがいを実行したいと考えている。そのために、Bさんは、対他関係では自己を肯定的に受け入れてくれる他者のみを選択し、対自関係では自己にとって快適なものや肯定的なものを取り入れていた。不快なものや否定的なものは自己を傷つける危険性がある。ゆえに、そういった危険性があるもの——たとえば身体的老衰や認知症——を予期し、これらに対して備える。このような自己のあり方をBさんは、「いきいきの秘密」であり、かつ「わがまま」であると指摘している。

このように生きがい遂行の土台となる身体性の老衰もしくは消滅が目前に迫ったとき、Bさんの場合、潜在化している“忘却され続ける矛盾”をえぐりだし、これを解消するような他者を自己に取り込むのではなく、むしろ“忘却され続ける矛盾”をそのままに、すべて受け入れてくれるような他者のみを選択的に取り込むように変化したと説明できる。

5 結論と課題

本稿では、生きがい獲得とその変遷について、対自関係（内省と創発の概念）と対他関係（準拠集団や重要な他者）に着目して、Bさんの生活歴編集データを分析してきた。より具体的には、過去のBさんによる対自関係において忘却された矛盾が、どのような対他関係によって、生きがいをつぎの段階に至らしめたか、インタビュー時のBさんが内省的に捉えているのかを検討してきた。分析の結果は表1に示した。

ここで、これまでのBさんの生きがい獲得とその変遷についてまとめておきたい。

生涯にわたるBさんの生きがいは、①見習い看護婦 → ②女手ひとつの子育て → ③人生相談 → ④信仰 → ⑤社協ボランティアと変遷してきた。

まず、Bさんが“①見習い看護婦”を生きがいとして獲得したときは、いじわるな兄嫁と軍事工場という不快なものからの逃避が内省を作用させる引き金となった。対自関係の内省は未熟で、むしろ対他関係における兄嫁や時代から要請される義務から逃げたいという衝動から、この生きがいを遂行することになったと考えら

表1 分析の結果

西暦	年齢	主な出来事、【危機】	矛盾、【生きがい】	対自関係		対他関係		番号
				内省と創発	肯定的	否定的		
1928	0	誕生	—	優劣 快不快	父・母	—		1 2
1942	14	【父の死】	宗教と医療の矛盾	宗教への 違和感	母			3
1944	16	看護婦に	【①見習い看護婦】	逃避	母・兄	兄嫁		4～7
1950	22	結婚し専業主婦	ジェンダー規範の矛盾 宗教規範と家族計画の矛盾	内向	母・姉	夫		8
1951	23	長男を出産						9
1953	25	次男を出産						9
1958	30	三男を出産						9
1961	33	四男を出産						9 10
1962	34	【生き別れの離婚】	【②女手ひとつの子育て】 ジェンダー規範の矛盾 世間からの差別	1人でやって いく決意	母 看護婦 看職療	兄たち		11～13
1963	35	【母の死】			母子寮 子どもたち	先輩		14～16
1967	39	母子会の理事に	【③人生相談】 助言の受容と拒否	自立した女 性への権し	母子会・本	差別		17～19
1975	47	【いじめによる転職】	人間関係の難しさ	忍耐	母子会	先輩		20～22
1976	48	クリスチャンに	【④信仰】	物事ことら われない	信者	—		23 24
1988	60	リタイア	【⑤社協ボランティア】 分かり合いながら踏み込まない	納得	自己	—		25 26
1992	64	【糖尿病】	精神的充実と身体的老衰	内向	自己	病気		25
1998	70	現在	利己的と利他的	自由 自己決定	自己	—		27～30

〔出典〕 調査結果を踏まえて筆者が作成した。グレーの部分は生きがいを示す。

れる。

つぎに、その後、結婚したBさんが離別し“②女手ひとつの子育て”を生きがいとするに至る際は、対他関係では身近な他者である夫が既存のジェンダー規範を守らなかったため、Bさんに忘却された矛盾をもたらし、この矛盾を解消するために、対自関係における反復的な内省の作動後、その飽和化によって、“創発の作動＝気づき”に至ったと分析した。

さらに、母の死後、支えを失ったBさんは母子会の理事となり“③人生相談”という生きがいを得た。これまではすべて1人でやっていく覚悟をしていたBさんであったが、支えとして母子会という再生力集団を獲得した。これは対他関係が、いわば身近な他者から準拠集団へと拡大化したと解釈できる。こうしてBさんは、対他関係の選択的拡大化、すなわち、どの対他関係を自己に取り込むかを自己コントロールできることを学んだ。

そして、いじめによる転職を経て、Bさんはクリスチャンになった。つまり“④信仰”も生きがいとなった。この生きがいはBさんが対他関係を選択的に拡大化していたことで可能となった。加えて、対自関係における内省の作動により、すでに獲得している生きがい、たとえば“②女手ひとつの子育て”や“③人生相談”等がすべて包摂されていった。

最終的に活動的高齢女性Bさんが到達した生きがいは“⑤社協ボランティア”であった。この生きがいには、Bさんが、年齢を重ね、人生の終わりを意識したことにより、到達した自己認識の仕方が観察された。それは近い将来に訪れそうな危機を予期したうえで、Bさんの対他関係をBさん自身が完全にコントロールすることであった。

これまでの自己物語論で議論されていたこと

は、対自関係において忘却された矛盾を内省するとともに、対他関係においては、その矛盾が他者に受け入れられるようなかたちで自己認識を変えていくというものであった。

しかし、Bさんの場合、エイジング過程のなかで、むしろ、その矛盾を受け入れてくれるような他者のみを選択的に自己に取り込むように変化していた。生涯にわたって創発を繰り返した結果、Bさんを堂々巡りに追い込むような、外部環境に存在する通俗規範や否定的要素を、自己内に取り込まないという判断が可能となった。

こうしてBさんは、生きがい遂行に際して、状況や環境に対して、自己の内側から、どのような対他関係を自己内に取り入れるかコントロールできるに至った。この知見は、自己の外側から自己物語を書き換えようとするセラピー的な自己物語論とは異なる。Bさんの生活歴編集データを自己物語論の視点で、内省と創発の概念を用いる方法により生きがいを分析したため、浮き彫りにされたものである。

社会学的課題も残されている。第1に、どの程度の反復的な内省の作動が、忘却された矛盾に気づかせ、創発に至るのかという課題が存在している。創発に至るプロセスには、Bさんのケースのほかにもバリエーションがあると考えられる。Bさんと異なるタイプのケースも検討する必要がある。第2に、インタビューした当時、Bさんが抱えていたはずの“忘却され続ける矛盾”は、20年経過した現在、どうなっているのか。この点については、今後実施する予定のBさんへの追跡インタビュー調査で検討されることになる。

注

¹ 井上 (1996) は小説論を援用し、ストーリーとプロットの相違点についてこう説明している。ストーリーとは時間の進行に従って事件や出来事を語ったものであるが、プロットとはそれらの時間的順序よりもむしろ因果関係に重点を置くものである。本稿では、Bさんの生活歴に含まれる生きがい獲得とその変遷についてのストーリーとプロットの両方を“生活歴編集データ”として扱う。

² 生活歴を語ること自体が、Bさんの内省(=再帰性、自己言及)を作動させているといえよう。

³ 浅野はこれを「語り得なさ」(浅野 2001: 14)と呼んでいる。これは「語り尽くせなさ」とはまったく異なる。語り尽くせなさとは、インタビューの時間が限られているために生じるものであり、逆にいえば、時間があれば語り得ることを意味する。しかし、ここでいう「語り得なさ」——本稿でいえば“忘却された矛盾”——は、時間をかけても語り得ないものであり、「自己物語のただ中に現れてくるようなもの」(浅野 2001: 15)である。ここでいう忘却とは、矛盾の解消ではなく、「やり過ぎること」であり、これは「自己物語の中に潜在し続け、いつでも物語にひびを入れかねない脅威であり続ける」(浅野 2001: 206)ものである。

⁴ つまり本稿では、問いと生活歴編集データに、自己物語論の視点(パースペクティブ)を導入するが、その方法(アプローチ)は、生活歴における生きがい分析となっている。

⁵ 生活歴ローデータも生活歴編集データも、前節で述べた自己物語論的な3つの特徴を有しており、「一人称で語られる様々なナラティブ」(野口編 2009: 16)の一つに位置づけられる。しかし後者の生活歴編集データは、ナラティブに「プロットが加わって出来事の〔因果〕関係が示されたもの」(桜井 2012: 58)である点で、ライフストーリーに近い。

ちなみにナラティブとは広義の意味でいえば「複数の出来事を時間軸上に並べてその順序関係を示すこと」(野口編 2009: 2)である。これに対して、ライフストーリーとは「インタビューによって個人の経験的語りが録音され、文字おこし(トランスクリプトの作成)がなされ、1つのまとまりをもった語りとして再構成されたもの」(桜井 2012: 6)を意味する。

⁶ Bさんが離婚を決めた1960年の全国の15歳以上人口の配偶関係の割合を確認すると、離別女性は719,524人(2.1%)、死別女性は4,784,279人(14.2%)となっていた。他方、インタビュー時に最も近い2000年については、離別女性は2,427,759人(4.4%)、死別女性は7,232,559人(13.1%)であった。以上から、Bさんが離別した当時、死別と比べて離別を選んだ女性が少数派であったこと、インタビュー時は、60年と比べて離別女性の数は3.4倍に、割合は2.1倍へと増えたことが確認できる(総務省統計局編 2014)。

⁷ 離別シングルマザーに対する「世間のさまざまな偏見や批判の目」(野田編 1980: 203)とは、「辛抱がたりない」「子どもが問題児だ」「ヒステリー」「欲求不満」というものであった。さらには福祉事務所や家庭裁判所においても偏見や批判が存在していた。

⁸ 母と一緒にボランティアに行ったムシロの家で、Bさんは、よその家の“酔っ払った父親”を目撃した。これについてBさんはインタビュー時、幼児体験として忘れられないと語った。この幼児体験は、酒飲みの元夫に苦悩した経験を振り返りながら内省したものといえる。ゆえに、幼少期のBさんのことを、観察者である70歳のBさんが「自己記述」(Luhmann 1990=1996)した、換言すると、70歳のBさんが、幼少期のBさんの「観察を観察すること」(Luhmann 1996=1996: 231)をおこなったといえる。

文献

- 浅野智彦, 2001, 『自己への物語論的接近 —— 家族療法から社会学へ』 勁草書房.
- , 2006, 「近代的主体の変容と自己物語論」『法社会学』64: 28-42.
- 天田城介, 2010, 『〈古い衰えゆくこと〉の社会学〔増補改訂版〕』 多賀出版.
- Barkan, Barry, 2003, “The Live Oak Regenerative Community: Championing a Culture of Hope and Meaning,” Audrey S. Weiner and Judah L. Ronch eds., *Culture Change in Long-Term Care*, New York: Haworth Social Work Practice Press, 197-221.
- 井上俊, 1996, 「物語としての人生」井上俊ほか編『岩波講座現代社会学9 ライフコースの社会学』岩波書店, 11-27.
- 片桐資津子, 1999, 「長寿化する女性の〈自己表現〉にみるプロダクティビティ —— 長寿化における『装い』と〈親密な他者〉の観点から」北海道大学大学院教育学研究科 1998 年度修士論文.
- 神原文子, 2010, 『子づれシングル —— ひとり親家族の自立と社会的支援』 明石書店.
- Luhmann, Niklas, 1990, *Essays on Self-Reference*, New York: Columbia University Press. (=1996, 土方透・大澤善信訳『自己言及性について』国文社.)
- , 1996, ‘Erkenntnis als Konstruktion’ (= 1996, 土方透・松戸行雄「構成としての認識」『ルーマン、学問と自身を語る』新泉社.)
- 野田愛子編, 1980, 『離婚を考える —— 自立する女性の生き方』 有斐閣新書.
- 野口裕二編, 2009, 『ナラティヴ・アプローチ』 勁草書房.
- 落合恵美子, 1994, 『21世紀家族へ —— 家族の戦後体制の見かた・超えかた』 有斐閣選書.
- 桜井厚, 2012, 『ライフストーリー論』 弘文堂.
- Schachter-Shalomi, Zalman and Ronald S. Miller, 1995, *From Age-ing to Sage-ing: A Profound New Vision of Growing Older*, New York: Warner Books.
- 総務省統計局編, 2014, 『日本の人口・世帯 —— 平成 22 年国勢調査最終報告書』 日本統計協会.
- 高橋勇悦・和田修一編, 2001, 『生きがいの社会学 —— 高齢社会における幸福とは何か』 弘文堂.
- 山田昌弘, 1994, 『近代家族のゆくえ —— 家族と愛情のパラドックス』 新曜社.

(かたぎり しずこ、鹿児島大学法文学部、katagiri@leh.kagoshima-u.ac.jp)

(査読者 天田城介 山井理恵)

Meaning of Life and Change Process for Active Elderly Woman: Focus on the Concept of Reflexivity and Emergence

Shizuko KATAGIRI

This paper will explore the mechanism, using the concept of Reflexivity and Emergence, of how an active elderly woman got the meaning of her life after getting over crises and what kind of crises she had overcome through her life. We will focus on B's personal history, a woman who had divorced with four children in the 1960s when divorce was still rare.

As a result of analyzing her personal history, it indicated that when she was in a critical situation, a paradox arose in her relationship with others triggering her to make clearer her meaning of life by working Emergence, through the repeated Reflexivity within herself. However as she grew older she gradually became able to anticipate these kinds of crises, and then change her worth living excluding the negative elements in her relationship with others.

This result not only matches our knowledge of the precedent study in a sociological self-theory that one person renews his/her self-narrative in the form that contradiction is accepted by the person close to him/her, but also shows another finding that after the repeated renewal of the self-narrative for a lifelong time, gradually the person will take just only the others who can accept the contradiction into his/her self-narrative.